

アイルランドの文学的伝統とジェイムズ・ ジョイス(1)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

70

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

70

(発行年 / Year)

2015-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011068>

アイルランドの文学的伝統と ジェームズ・ジョイス（1）

結 城 英 雄

アイルランドにおけるジョイス受容

ジェームズ・ジョイスの主要な作品は、短篇集『ダブリンの市民』（1914）、自伝的小説『若い芸術家の肖像』（1916）、『オデュッセイア』を基にした『ユリシーズ』（1922）、そして様々な言語を織り交ぜた『フィネガンズ・ウェイク』（1939）の四作。いずれも文学の地平を切り拓いた傑作で、世界的に評価されているが、いずれもアイルランドの都市ダブリンを舞台とし、性の問題を含め市民の生態が克明に描かれている。そのためアイルランドでは長きにわたり、ジョイスを理解できるのはアイルランド人だけであると語りながら、自国民がジョイスの作品を読むことはタブーとしてきた。

アイルランドでジョイスを敬愛したのは少数の作家たちだけであった。出版もその経緯を物語っている。いずれの作品も国外で刊行されている。この事情はジョイス研究にも反映し、これまで欧米がその主導的な役割を担ってきた。特にアメリカはジョイス研究に大いに尽力してきた。1933年の『ユリシーズ』の猥褻裁判で勝利をもたらしただけではなく、ジョイスの草稿や手紙など貴重な資料をほとんど入手し、研究の拠点となっていたのだ。ジョイスについての研究誌『ジェームズ・ジョイス・クォーターリー』も、1963年以降、アメリカで発行されている。同じくヨーロッパ大陸の国々も、アメリカの研究に呼応して、新たな批評理論の構築に貢献してきた。ジョイス研究のほとんどがアイルランドの外の世界で展開されていたのである。

アイルランドでジョイス受容が開始されたのは、そうした国際的な動向に抗しきれなくなったことによる。その契機が1982年のジョイス生誕百年祭で、このときジョイスがアイルランド人作家であると承認された。それに加え、アイルランドはすでに1973年にECに加盟しており、ヨーロッパの視点も受容する必要があった。そしてジョイス没後50年が経過した1992年、著作権が切れ、ジョイスの主要四作の他、詩や劇や評論も含め、アイルランドの研究者によって解説と注釈がほどこされ、いずれもペンギン版で刊行された。アイルランドは『ユリシーズ』が出版された1922年以降、南北に分裂しており、ジョイス受容はカトリックを中心とする南のアイルランド共和国にとって、アイデンティティ確立の戦略でもあったのだ。

アイルランド共和国はイギリス領の北アイルランドと政治的にも文化的にも敵対しており、ジョイス受容はイギリス文学への対立の試みでもあった。その状況を端的に示しているのがシェイマス・ディーンたちによる、アイルランド人作家の選集を集めた1991年刊行の『フィールド・デイ・アンソロジー』

である。ジョイスの作品も当然のごとく取められた。同時に、アイルランドは1993年にEUの加盟国ともなり、ジョイスの文学は国家のブランド品ともなった。ジョイス受容は国民の誇りを高めただけでなく、国際社会への門戸開放を示す方策ともなっていたのだ。いずれにせよ、アイルランド側のジョイス研究への参入は、ジョイスの作品の詳細な読解をもたらし、2008年には『ダブリン・ジェイムズ・ジョイス・ジャーナル』も誕生した。

その一方で、世界的な作家としてのジョイス受容は、アイルランドの文学的伝統に対する新たな修正を始動した。デイヴィッド・ケアンズとショーン・リチャーズの『アイルランドを書く——植民地主義、民族主義、文化』（1988）やデ克蘭・カイバードの『アイルランド創出—現代国家の文学』（1995）などの研究書は、そうしたアイルランド事情を示唆している。とりわけジョイス受容は、宗教的・政治的な問題を胚胎しており、プロテスタントの作家に対する評価の毀損も生み出した。トマス・キンセラの『二重の伝統—アイルランドの詩と政治についての評論』（1995）やニール・コーコランの『ジョイスとイエイツ以降——現代アイルランド文学を読む』（1997）など、イギリス系アイルランド人のうちでも最大の作家 W. B. イェイツに対立する存在として、ジョイスを位置づけた。またジョイス受容を契機として、政治的な視点からアイルランドの文学的伝統を再評価する、ゲリー・スマイスの『脱植民地化と批評——アイルランド文学の構築』（1998）などの論考も登場した。さらに、モダニズムの概念そのものを再定義する、イマー・ノーランの『ジェイムズ・ジョイスと民族主義』（1995）のような著作も刊行されている。

本稿は、そうしたアイルランドでのジョイス受容の流れをたどりながら、その受容がもたらしたアイルランドの文学的伝統への影響を具体的に探るものである。アイルランドにおけるジョイス受容の波紋を論じる研究者は少ない。これまでモダニストとしてのジョイスの位置を測定し、さらにジョイスの文学の源泉がアイルランドにあることも論じてきたが、モダニストとして定立された世界的な作家としてのジョイスが、逆にアイルランドの文学的伝統に及ぼしている影響についての視点は欠けていた。以下でこれまでの研究の空白部を詳らかにしたい。

実のところ、アイルランドにおけるジョイス受容は、アイルランドの文学的伝統と大きく関わる問題であった。ジョイス受容が時代の要請であることから、その作品解釈もアイルランドの文脈に即する必要もあった。アイルランド側からのジョイスへの接続の試みは、「モダニズム」の定義そのものを修正するか、アイルランドのEU加盟と関連させて「ポストナショナリスト」として語ることであった。これらのジョイス研究は、1980年代以降のアイルランドを語る、その方便であるだろう。

同時に、アイルランドにおけるジョイス受容が時代の文脈に即することから、アイルランドの文学的伝統をめぐる構想も、時代と不可分な変容であった。プロテスタントとカトリックの対立図式も、時代の文脈のなかで登場した構想である。ジョイスがカトリックの中心的な作家として前景化されるとき、プロテスタント系のイエイツはアイルランドの文学的伝統の周縁に位置づけられよう。かくしてアイルランドでのジョイス受容は、ジョイスについての文学的評価を下すよりも、ジョイスを取り込み、予定調和的な「アイルランド国民文学史」を提示する傾向にあったことへと論が広がる。アイルランドにお

けるジョイス受容の流れを丹念にたどることで、今日のジョイス研究やそれにともなう文学的伝統の変容について、その対案が提出できると思われる。

アイルランドでのジョイス受容は大きく4期に分けられる。すなわち、①1922年のアイルランド独立からジョイスが亡くなる1941年までの「潜伏期」、②ジョイス没後からジョイス受容が承認される1982年までの「変遷期」、③ジョイス受容の承認から北アイルランドとの和平協定が締結される2007年にいたる「開花期」、④2007年の和平協定締結から今日に至る「転換期」の4期である。時代区分の参照枠としては、テレンス・ブラウンの『アイルランド——社会的・文化的歴史——1922年-2002年』(2004)が有益な資料である。同時にジョイスの文学に関わるアイルランド側の評価を中心に、文学的伝統の変容とからめ、フラン・オブライエンからシェイマス・ヒーニーに至る、主要な作家の作品や立場も念頭に入れることにする。年代順に考察し問題点を析出したい。

潜伏期(1922年～1941年)

アイルランド事情

1922年から1941年における「潜伏期」は、ジョイスが『ユリシーズ』を出版してから亡くなるまでの期間で、アイルランドもイギリスから自治権を獲得し、カトリックの信仰に拠って立つ独自の内向政策を展開した。特に1929年の出版物検閲法令の制定は、その後の文学的伝統の構想を方向づけることになった。そのような閉塞的な状況において、『ユリシーズ』で発禁処分を下されていたジョイスは、忌避されるべき作家となっていた。この時代はまたプロテスタントの文学者を疎外していた。サミュエル・ベケットやショーン・オケイシーたちは亡命の道を選び、1923年にノーベル文学賞を受賞したユェイツさえも自国では孤立していた。一枚岩的な国民文学の構想こそがこの時代のアイルランドの課題であったのだ。

1920年代から1960年代初頭にいたるまで、アイルランドは眠っているようであった。経済活動の低迷、失業者や移民者の増加といった状況に加え、閉塞的な社会事情もあった。カトリック教会の精神支配も大きかった。カトリック教会は自由国成立後も、アイルランド国民の擁護者としての役割を自認し、外国の不道徳な影響から国民を守り、国民の純潔を保護することを自らの使命としていたのである。かくして「性的な純潔は国家の純潔という理念……と同義語になった……国家の不道徳の根源はまたしても、古くからの主人である異教徒のイギリスに帰されることとなった」(Kearney 247)のだ。すでにダグラス・ハイドが「アイルランドにおける脱イギリス化の必要性」(1892)を説き、デニス・モーランが『アイルランド人のアイルランド哲学』(1905)において、アイルランドがイギリスから政治的にも、文化的にも、経済的にも完全な独立を達成し、自らの言語、慣習、文化を持つ自治国家としての地位獲得を力説していた。自由国はそうした思想を基盤としていた。

そのような状況において、ジョイスの文学を賛美したのは、カトリックでありながら、同じような孤立感を抱いていたフラン・オブライエンなど、少数の作家である。そしてショーン・オフェイロンは自

由国の裏に潜む現実に目を向け、窒息したような風土に漂う瀕死の状況を描いて見せた。同じくパトリック・カヴァナも詩集『大いなる飢え』（1942）において、土地、母親、教会という三つの勢力に支配され、生命力を枯渇させられている主人公の苦悩を描いている。新国家の内部にはまさしく陰鬱な空気が漂っていた。アイルランドはエイモン・デ・ヴァレラが支配する農業国家となっていたのである。

ジョイスに公然と敬意を払ったのは、むしろプロテスタント系の文学者であった。ジョージ・ラッセルが機関誌『アイリッシュ・ステイテスマン』で、あるいはエリザベス・ボーエンたちが文芸誌『ベル』において、ジョイスの文学に理解を示すことになる。このように独立後のアイルランドは、ジョイスが亡命せざるをえないような社会状況をさらに加速させていた。かくしてジョイスの文学はアイルランドの文学的伝統の影で受容されざるをえなかったが、その名声がアイルランドの作家たちを鼓舞していたことに疑いはない。ジョイスは手本であった。

事実、フラン・オブライエンが創作を開始したころ、ジョイスはパリにおいていまだ健在であった。そしてジョイスはアイルランドのことやアイルランドが抱える問題から距離を保ちながらも、アイルランドに諸々の課題を突きつけていた。ジョイスは終始一貫してダブリンを作品の舞台としながらも、その先鋭な文学は、アイルランドの内向政策とまさしく対照的であった。そうしたジョイスの名声に憧れながらも、オブライエンが独自の文学を創作したことは驚異でもある。『スウィム・トゥー・バーズにて』（1939）など、のびやかでポストモダンに位置する作品である。

ともあれ、1922年に成立したアイルランド自由国は、自国のアイデンティティを構築することになった。その方向を反映しているのが1929年の検閲法令であった。検閲にまつわるこの時代の問題は、マイケル・アダムズ、ジュリア・カールソン、ダーモット・キョーなどの著作が参考となる。道徳的な観点から国民に適切な書物を選定するのが検閲法令の大義名分であった。が、ジョイスの『ユリシーズ』が国際社会で禁書になっていた都合から、この小説への検閲はアイルランドの関与する事態ではなかったらしい。その後、アメリカの猥褻裁判で禁書を解かれたものの、アイルランドは好意的な反応を示すこともなかった。ジョイスの作品はいずれも国外で出版されており、書店に販売の自粛を求め、家庭でも読まないようにという方針が守られていたにすぎない。

たとえば、『ダブリンの市民』についての反応はこんな具合である。「どの都市にも奇人変人がいるし、ダブリンもその例外ではない。だが、ジョイスはこうした人間を必要以上に強調している。作家たるものはそうした人物の描写を控えるものである」（Deming 68）。『若い芸術家の肖像』についても同様である。「ジョイスは醜聞に墮している。偉大な作家はジョイスが描く側面を知らないわけではないが、正しい視点に拠り、他を排除してまでも醜聞を描くことはない」（Deming 98）と論じられた。『ユリシーズ』については、ジョイスがアイルランドを茶化していることに憤り、その一方でジョイスを理解できるのはアイルランド人だけだと語った。ショーン・レズリーは「ミスター・ジョイスの作品を文学的過激主義と呼んでも間違っていないだろう……まったく不道德である」（Deming 207）と述べた。『フィネガンズ・ウェイク』については、「フィネガンの通夜（目覚め）は、文明の賛美であるとともにその埋葬でもあるだろう。自分の教育、環境、さらにはヨーロッパ全体の文明の体系への嫌悪が、おそ

らくはフィネガンが体現する人生そのものに対する嫌悪が、この文学的過激主義を生み出しているのである……これは文学における最大の冗談である」(Deming 674-75) といった論調であった。

そんなアイルランドにおいても、ジョイスの文学的真価を理解する作家の一人、ボーエンの1941年の『ベル』での哀悼の辞は忘れがたい。彼女曰く、「ヨーロッパとアメリカはジョイスを喝采した。しかし同国民としてのわたしたちは、彼を他の国民と別のように理解できる……わたしたちは最大の小説家をヨーロッパに与えたが、この厚いレンズの眼鏡をかけ、控えめな痩せた男は、どこへ行こうと、わたしたちのものであるし、わたしたちの仲間である」(Bowen 49)。ボーエンの言葉は彼女一人のものでなく、ジョージ・ラッセルやジョン・エグリントンといった、プロテスタント系の文学者の心情をも代弁していたであろう。

にもかかわらず、ボーエンはその後のアイルランドの流れを見落している。とりわけ「別のように理解できる」という箇所には疑問が残る。アイルランドでのその後のジョイス研究に関わる難題だ。アイルランドはジョイスの祖国であるばかりか、彼の作品の舞台にもなっている。そうした地理的・歴史的にも有利な状況にあるアイルランドにおいて、ジョイス研究が開始されるのはほどなくのことであるが、ジョイス受容にはそれなりの対立と、学風の変貌が必要となる。

大陸でのジョイス評価

まさしくこの「潜伏期」と称する期間において、国外でのジョイス評価はめざましかった。ジョイスがアイルランド人であるかどうかといった事情は無視され、国際的な作家として評価されていたのである。とりわけ、アメリカ人のユージン・ジョラスは、妻とともにパリで前衛誌『トランジション』を1927年から1938年まで刊行し、ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』のほとんどを『進行中の作品』と称して掲載した。多様な言語で構成された『フィネガンズ・ウェイク』には反論もあったが、ジョラスの言語観はのびやかであった。英文学を読むのにスカンジナビア語を学習する必要があるかどうかといった疑問に対しても、「精神の完全な国際化が急ピッチで進行しつつある時代にあって、ラテン語やギリシア語について精通しており、その他の言語についてもいくぶんかの知識があるだけでは十分ではない」(Jolas 81-82) と答えている。国際人としてのジョラスにとって、ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』は自らの文学観の試金石でもあったのだろう。

ひるがえって、ジョイスの名前を国際的に広めたエズラ・パウンドも、アイルランド人としてのジョイスの出自を否定し、国際的な作家として評価していた。パウンドによれば、ジョイスは民族主義を超越した作家であり、その評価は『ダブリンの市民』から変わることはないとしている。パウンドはジョイスのリアリズムを讃美して、フロベールを受け継ぐ硬質で明晰な文体の作家と称して、その作風を評価していた。したがって、パウンドは『エゴイスト』誌での『ダブリンの市民』の書評において、「ジョイスはアイルランドの農民演劇産業を推進する機関ではなく、国際的な散文の水準を受け入れ、それに見合っている……彼はあるがまま描いている。それはダブリンのためだけでなく、すべての都市に適用する類のものである……彼は大陸の作家の同時代人の一人として書いているのである」(Pound 28-29)

と述べている。

パウンドは『若い芸術家の肖像』の書評においても、『エゴイスト』誌で同じくこう褒め称えている。「当初、ダブリンの出版社から拒まれ、後にはイギリスの出版社から厭われながらも、トリエステのアイランド人によって書かれ、ニューヨーク市で出版された。ジョイスをイギリスやアイランドの作家と比べてみても、定義に役立つかどうか疑わしい……強いて言えば、フランスのプロベールに連なるだろう。『若い芸術家の肖像』や『ダブリンの市民』の数篇をより多くの人が読んでいたなら、最近のアイランドの騒乱も軽減したことだろう。明晰な診断にはそれなりの効果がある」(Deming 83)。ジョイスの文学の国際性を前提とした評言である。

パウンドの評価には曖昧な部分があるものの、ジョイスに対してアイランド人という偏狭な視点を抱くことはなかった。そもそも、ジョイスが世界的な作家になるのに大きく貢献したのはまさしくパウンドである。イギリスの『エゴイスト』誌への『若い芸術家の肖像』の連載の機会を与えたばかりか、アメリカの『リトル・レビュー』誌への『ユリシーズ』の連載をも調停した。パウンドはジョイスにとって奇跡の新薬でもあった。こうした事情もあり、パウンドはジョイスをパリに呼び寄せ、文学活動をさらに支援した。『ユリシーズ』の評価めぐり意見の相違のため、パウンドとジョイスはほどなく疎遠になったが、ジョイスにとりパウンドは恩人であり続けた。

この時代のジョイス評価にはスチュアート・ギルバートも貢献している。彼は『ジェイムズ・ジョイスの「ユリシーズ」』(1930)において、『ユリシーズ』が古典文学を基礎として構想されていることを説いた。『ユリシーズ』がフランス以外で禁書の処分を下され、その内容が一般の人々には知られていない時代のことであったが、物語を要約し、『オデュッセイア』との照応関係を詳細に論じた。ギルバートはまたジョイスと協力して『ユリシーズ』の仏訳も行った。その研究姿勢はT. S. エリオットの論考『「ユリシーズ」、神話、秩序』(1923)の延長にあるが、ギルバートは精緻な解読により、ジョイスが古典に連なる作家であることを強調した。『ユリシーズ』を浄化するような感触もあり、猥褻裁判に備えた前哨戦のような研究であった。

ギルバートの研究の翌年に出版されたのが、エドモンド・ウィルソンの『アクセルの城——1870年より1930年にいたる想像的文学の研究』(1931)であった。その論考にはジョイスの『ユリシーズ』論も収められている。ウィルソンはヨーロッパ文学の流れを射程におき、広い視野でジョイスを論じた。フランス文学の自然主義と象徴主義の合流としての『ユリシーズ』論は、以降のジョイス研究への基礎をなす。象徴主義という観点からすれば、エリオットやギルバートを受け継いでいる。同時に自然主義という観点からの『ユリシーズ』論は、その後のジョイス研究の嚆矢となる要素を含んでいた。そしてギルバートの研究と同じく、ウィルソンの論考も猥褻裁判の擁護に貢献した。

そのような状況の下、フランク・バジェンが『ジェイムズ・ジョイスと「ユリシーズ」の成立』(1934)を刊行した。バジェンとジョイスとの出会いはチューリヒでのことで、1918年から二人の親密な交流は始まる。バジェンの語り口はジョイスの発言に沿いながら、テキストの構成方法を論じるもので、ジョイスの人間味あふれる心情をくみ取りながら、『ユリシーズ』の各挿話の意義を論じている。

ブルームが「オールラウンド」な人物としてのオデュッセウス像を基礎にしていること、あるいはダブリンがテキストから再構成可能であるといったジョイスの発言なども、バジェンの著作から広く流布することになった。

イギリスのジョイス嫌悪

このような大陸でのジョイスの評価にもかかわらず、イギリスではジョイスへの攻撃を開始していた。アイルランドは英語圏の一部にすぎないことを自覚できていない国家であると思われていたのだろう。したがって、ジョイスの作品に対するイギリスの評価は、アイルランド人としての出自と密接に関わっていた。アイルランドは実に七百年以上もイギリスの支配下におかれ、その間のイギリスの対アイルランド政策は巧妙を極め、アイルランド人に劣等感を植えつけ、自らの支配を当然視していたのである。とりわけ民族主義に沸き立つ十九世紀後半、アイルランド人はキャリバン、チンパンジー、ヤフーなどと呼ばれた。文明人であるイギリス人の支配下におかれなければ、アイルランドは無秩序に陥るとまで考えられた。イギリス人の精神には、人種論と帝国主義とが分かちがたく結び合っていたのである。イギリスのジョイスに対する評価もそうした状況とは無縁ではない。

『ダブリンの市民』の書評では、この作品は「くすんだ事に心惹かれる多くの階級に推薦したい」と皮肉られたり、あるいは作者が「自国の人々が自分の書いている通りの人間であるという確信を植え付ける」(Deming 60)と警告された。さらにある批評家から、この作品は「アイルランド人の性格の底流を扱う短篇集」であり、天才の片鱗をうかがわせるものの、「天の青さを知らず、絶望という地獄に靈感を求める」(Deming 64)類のものであると論じられた。いずれの書評も、ジョイスの文学をアイルランド人と結びつけている。

『若い芸術家の肖像』についての書評も変わらない。ジョイスはジョナサン・スウィフト、ローレンス・スターン、バーナード・ショー、オスカー・ワイルドに連なる「アイルランド人作家」と規定されている。そしてイギリス人と対照的に、主人公のスティーヴンは、「物事と和解できない多くのアイルランド人の一人である」(Deming 89)と主張する向きもあった。さらにスティーヴンについては、アイルランド文学ルネサンスの外側に立つことに苛立ちつつある、新たに出現した「教育あるカトリックの一人」だと断定し、そのヒステリー症状がこの作品に結晶したと説いている(Deming 94-95)。

『ユリシーズ』については徹底的に攻撃された。エドマンド・ゴスはルイ・ジレへの書簡でこう述べている。「これは無秩序な作品で、趣向においても、文体においても、すべてにおいて劣悪である。ミスター・ジョイスは、イギリスで自ら著書を刊行、もしくは販売することができない。そのうえ、彼は〈私家版〉をパリで出し、一冊につき法外な価格を要求する。彼は一種のサド侯爵であるが、それほど文章がうまくはない。彼は気まぐれなアイルランド人の典型であり、イギリス嫌いの人間だ……イギリスの判断力のある有力な批評家で、ミスター・ジョイスをいささかなりとも重要な作家と考える人はまずいない」(Deming 313)。フランス嫌悪とアイルランド蔑視を背景とする発言だ。

イギリス人であるからといって、すべてがすべて同じ反応を示すわけではないが、そうしたイギリス

側に立つ批評家の一人として、ウィングダム・ルイスがいた。彼は1927年に『時間と西欧人』を発表し、その中でジョイスが時間に憑かれた作家であると酷評した。知性が欠如したジョイスの作品は、その文体の背後に、瓦礫の山を積み上げているにすぎないと論じたのだ。ルイスの批判は、エリオットの『ユリシーズ』、神話、秩序』で黙秘されていた部分、すなわち現代が「無秩序」の状況にあるといったところを強調したものである。それに加え、ルイスはジョイスがアイルランド人であることにことよせ、『ユリシーズ』の内的独白がアイルランドの無秩序を描出しているとした。

実のところ、ギルバートもバジェンもイギリス人であるが、ジョイスがアイルランド人であることをことさら意識することはなかった。そもそも、生涯にわたりジョイスを経済的に支援したハリエット・ショー・ウィーヴァーも、イギリス人であった。したがって、ルイスが例外とも思えるが、ヴァージニア・ウルフやD. H. ロレンスといった著名な作家たちも、アイルランド人作家としてのジョイスに敵意を抱いていたことは想起しておきたい。物質主義者とウルフが批判したH. G. ウェルズ、アーノルド・ベネット、あるいはジョン・ゴールズワージーのような作家たちの方が、むしろ寛容な評価を下していたようだ。こうした状況からして、イギリスの作家たちには先鋭な文学を咀嚼する免疫が備わっていないのではないか、といった疑念が持たれても当然であるだろう。

かくしてイギリスではジョイス研究が育つことはなかったが、その閉塞的な動向に大きく関わったのがケンブリッジ大学のF. R. リーヴィスであった。彼は雑誌『スクルーティニー』を発刊して英文学の「偉大な伝統」を確立した学者であり、イギリスの英文学研究の中心的存在であった。そのリーヴィスがジョイスの文学、とりわけ『進行中の作品』を酷評して、モダニズムの大変革者としてのジョイスの地位に異議を唱えたのだ。彼は1926年に『ユリシーズ』を読むための申請を当局に願い出たこともあったが、『エゴイスト』、『リトル・レビュー』、『トランジション』といった雑誌には関心を示すこともなかった。そして「ジェイムズ・ジョイスと言語革命」と題する論考を1933年9月の『スクルーティニー』誌に掲載し、ジョイスの『進行中の作品』に対する批判を行った。

ジョイスに対するリーヴィスの批判は言語観によるところが大きい。リーヴィスはジョイスの『進行中の作品』は読むに値しないと酷評するが、その論拠はジョイスのシニフィアンとシニフィエとの脱臼にあった。英語という言葉は土地に根を下し、国民の精神の要となっている。その立場を崩しているのがジョイスである。リーヴィスはジョイスがアイルランド人であるといった指摘は控えているが、イギリスという地域を離れ、パリという国際社会で創作するジョイスの文学は、言葉に対するフェティシズムを抱えた、欠陥のある外来品にすぎなかったのだろう。リーヴィスのイギリス中心の姿勢は、サミュエル・ベケットのような作家によっても批判されることになる。

リーヴィスが許容できなかったのは、モダニズムの国際的な相貌であったと思われる。すなわち、「コスモポリタニズムと国際性、言語や形式をめぐる自意識的な実験、自立した芸術作品という考え、現代世界に対する観点が格段に強度であることによって疎外される芸術家という概念」(Sinfield 182)など、リーヴィスの嫌悪するところだったと思われる。彼から見れば、ジョイスは魂を持たない、文学の職人にすぎなかったのだ。

リーヴィスの功績は強固な信念のようなもので、その後のイギリスの文学観を支配した。正確に言えば、1970年代に入り、同じケンブリッジ大学のスティーヴン・ヒースとコーリン・マッケイブによって、ジョイスの奪還闘争が開始されるまで、リーヴィスの評価が支配していたのだ。が、この二人はフランスの批評理論を経由して、リーヴィスと対照的なジョイス評価を展開することになった。ここではマッケイブの議論を取り上げ、リーヴィスの問題点を指摘しておきたい。

マッケイブは論考「文化における居心地の悪さ」（1972）において、エルマンの『リフィ河畔のユリシーズ』（1972）を告発している。マッケイブの背景にはロラン・パルトやミシェル・フーコーの思想があるらしく、エルマンの「ジェームズ・ジョイス」というシニフィアンへの異議が唱えられている。マッケイブによると、エルマンの読みの成果は、「提示された言語の現実を無視し、言語を作者＝主体がメッセージを伝達するために使用する道具に再び変換すること」（MacCabe 174, 176）にすぎない。エルマンの研究はジョイスという作者に統一を求めることであったが、しかしマッケイブはそのことを問題にしているのである。これはリーヴィスの説いた論への反論とも思われる。そうした背景の下、彼はこう主張する。

今日のイギリスにおいて、『ユリシーズ』出版50年が経過し、『フィネガンズ・ウェイク』の登場以来30年が過ぎたが、ジェームズ・ジョイスのテキストは、わたしたちの文化で居心地の悪い立場にある。わが国のジョイスの作品に関わる批評史は回復の歴史だ。（MacCabe 174）

マッケイブの姿勢が反リアリズムにあることは明かだ。こうしてリーヴィスと対立する視点がまさしくケンブリッジ大学で誕生することになった。事実、マッケイブはジョイスをテーマとした講義を行った。にもかかわらず、保守勢力の強いケンブリッジ大学でのこと、1980年に彼の過激な講座は閉じられ、マッケイブは大学を追われた。いわゆる「マッケイブ事件」と呼ばれている。その前年に刊行された『ジェームズ・ジョイスと言語革命』（1979）も、悪評を浴びせられた。イギリスのジョイス研究はその後の課題となった。

アメリカでのジョイス受容

一方、ジョイスの才能を認めたパウンドも、エリオットも、さらにジョラスもアメリカ人であった。さらに、『ユリシーズ』を刊行したシェイクスピア・アンド・カンパニー書店のシルヴィア・ビーチにしても、やはりアメリカ人である。『ユリシーズ』は第十三挿話を連載したことで、すでに猥褻の烙印を押されていたが、ビーチはあえてその出版を決断した。一世一代の賭けのようなものであったが、ジョイスも『ユリシーズ』の計画表を作成し、優れた文学としての体裁を整えた。パリにおいてこそ可能な仕事であっただろう。ヴァレリー・ラルボーのような共鳴者も出現した。

それでも『ユリシーズ』は各国で押収され焚書の憂き目にあった。その状況を覆したのがアメリカでもあった。まさしく1933年、『ユリシーズ』の猥褻裁判がアメリカで行われ、ジョイスの『ユリシーズ』

への禁書処分が取り下げられたのだ。『ユリシーズ』の猥褻性への反論は、大きく以下の6点に纏められる。①猥褻という概念は時代の変貌と関わり、かつて禁書処分を受けた文学も今では読まれている。②人体についての医学書が猥褻でないように、性を追求した文学テキストも猥褻ではない。③古典的な作品はポルノと異なり猥褻ではない。④ジョイスは至高の作家であり、『ユリシーズ』は普通の読者のレベルをはるかに凌駕している。⑤作品の優劣の判断はエリートの領域にある。⑥部分よりも全体が問題であり、猥褻な箇所も全体との関わりで判断される (Vanderham)。

こうして『ユリシーズ』は発禁処分を解かれ、ジョイスは有名人になった。裁判はみそぎ祓いであり、ジョイスという名前は浄化された。先述したスチュアート・ギルバートの『ユリシーズ』についての研究書も勝利に大きく貢献した。その一方で、勝利に使用された名目がその後の研究を支配したことは否めない。『リトル・レビュー』での連載を廃止する契機となった第十三挿話の娘の描写、あるいはその後にかかれた第十八挿話の女性の内的独白など、ほとんどポルノと言ってもいい。ジョイスの作品は『ダブリンの市民』からして、出版社に危惧を与えるような要因を秘めていた。その後の研究はそうした事態をうまく取り込まざるをえなくなっている。

ハリー・レヴィンがアメリカでのジョイス研究を始動したのはそのような状況においてであった。その『ジェイムズ・ジョイス — 批評的入門書』(1941)は、その後のアメリカのジョイス研究の礎石となる。学術的にも優れた文学者としてのジョイス像を定立すると同時に、研究の拠点をパリからアメリカへ移行させる役割も果たしたのである。レヴィンの研究姿勢は紛れもなくコスモポリタンのであり、ジョイスを読むにあたり、濫蓄のあるヨーロッパ的な文脈で包み込んでいる。このあたりの事情からすると、レヴィンがウィルソンの後継者であることは明らかだろう。神話的な側面とリアリズム的な側面との融合を図っている。視野の広さがアメリカの学風であった。

そうした学風に即して、レヴィンもまたアイルランド人としてのジョイスに関心を示さない。ジョイスの文学はアイルランドやアイルランド文学から切断されているとしている。ジョイスの作品はアイルランドで出版されることもなかったし、さらには販売されることもなかった。加えて、レヴィンのジョイス研究は見事であった。彼はジョイスの手法として、「映画のモンタージュ、絵画の印象主義、音楽のライトモチーフ、精神分析における観念連合、哲学のヴァイタリズム」(Levin 82-3)を挙げている。あるいは、『ユリシーズ』の『オデュッセイア』との照応が、ダブリンを矮小化することにある (Levin 60) といった指摘もある。さらに、レヴィンはジョイスの作品からトマス・マンなどを連想しながら、その抑制、均衡、芸術的達成なども賞賛している (Levin 69)。

そうしたレヴィンを受け継ぐかのように、アメリカでのジョイス研究においては、リチャード・エルマンとヒュー・ケナーという対立する二人の批評家が登場する。エルマンは『ジェイムズ・ジョイス伝』(1959/1982)で、ケナーは『ダブリンのジョイス』(1957)で知られている。これまでのジョイス研究においては、それぞれ T. S. エリオットとエズラ・パウンド、あるいはスチュアート・ギルバートとフランク・バジエンの延長戦に立つ。いわゆる、ジョイスのテキスト解釈をめぐる、象徴的に読むか、もしくは事実的な側面を強調するかの相違である。

エルマンはイエイツ研究から出発し、ジョイスに関心を抱いたらしい。その『ジェイムズ・ジョイス伝』はいまだに凌駕されることはない。芸術家としてのジョイスの生涯の全貌を網羅的に、なおかつ作品を読んでいない読者にも理解できるよう広く論じている。エルマンはこうしてジョイスのカノンとしての文学的位置の確立に貢献した。今では極めて貴重な文献である。一つはジョイスの孫のスティーヴン・ジョイスによる検閲のため、資料の開示が不可能になっていることによる。もう一つはジョイスについて知っている人々が亡くなっているため、その資料の入手が不可能になっているためである。加えて、ダブリンばかりか、トリエステ、チューリヒ、パリといった都市も変貌してしまっている。

その一方、ケナーはジョイスの作品に焦点を合わせ、緻密な読みを展開し、モダニストとしてのジョイスを定立した。ケナーはマーシャル・マクルーハンの弟子であり、メディア論をその研究の根底においていた。『ダブリンの市民』所収の「イーヴリン」論においては、ダブリンの船舶の時刻表なども詳細に調べ、物語の背後に「白人奴隷」のテーマを洞察した。『若い芸術家の肖像』の主人公スティーヴン・ディーダラスをめぐる論考においても、作者と主人公との間の微妙な距離を見抜いてみせた。また『ユリシーズ』の主人公のブルームについても、その知識がゴミの山であると指摘した。ケナーの関心は宗教の教義、テクノロジー、あるいはテキスト性といったところにあり、ジョイスをモダニズムの文学と連動させることであった。

アメリカのジョイス賛美の背景には、イギリスへの対抗が潜んでいたかもしれない。アイルランドがイギリスの植民地であったことへの同情もあった。そうした事情と密接な関わりがあったのがアイルランド系アメリカ人の存在であった。アイルランドがいずれ自らの姿勢を正すのも、そうした同胞の営為によるところが大きい。

科研研究課題番号：26370335

引用・参考文献

- Adams, Michael. *Censorship: the Irish Experience*. Dublin: Scepter, 1968.
- Beckett, Samuel et al. *Our Exagmination Round his Factification for Incamination of Work in Progress*. Paris: Shakespeare and Company, 1929.
- Bowen, Elizabeth. "James Joyce." *Bell*, vol. I, no. 6 (1941): 40-49.
- Brown, Terence. *Ireland: A Social and Cultural History 1922-2002*. London: Fontana, 2004.
- Budgen, Frank. *James Joyce and the Making of "Ulysses."* London: Grayson and Grayson, 1934.
- Cairns, David and Shaun Richards. *Writing Ireland: Colonialism, Nationalism and Culture*. Manchester: Manchester UP, 1988.
- Carlson, Julia. *Banned in Ireland: Censorship and the Irish Writer*. Athens: Georgia UP, 1990.
- Corcoran, Neil. *After Joyce and Yeats: Reading Modern Irish Literature*. Oxford: Oxford UP, 1997.
- Deming, Robert H, ed. *James Joyce: The Critical Heritage*, vol. I and vol. II. London: Routledge & Kegan Paul, 1970.
- Eliot, T. S. "Ulysses, Order, and Myth." Ed. Seon Givens. *James Joyce: Two Decades of Criticism*. New York: Vanguard P, 1963. 198-202.

- Ellmann, Richard. *James Joyce*. Oxford: Oxford UP, 1982.
- Gilbert, Stuart. *James Joyce's "Ulysses."* London: Faber, 1930.
- Givens, Seon, ed., *James Joyce: Two Decades of Criticism*. New York: Vanguard P, 1948.
- Jolas, Eugene. "The Revolution of Language and James Joyce." Beckett and et al, *Our Exagmination*. 77-92.
- Kearney, Richard. *Transitions: Narratives in Modern Irish Culture*. Manchester: Manchester UP, 1988.
- Kenner, Hugh. *Dublin's Joyce*. Indiana: Indiana UP, 1956.
- Keogh, Dermot. *Twentieth-Century Ireland: Nation and State*. Dublin: Gill and Macmillan, 1994.
- Kiberd, Declan. *Inventing Ireland: The Literature of the Modern Nation*. London: Vintage, 1995.
- Kinsella, Thomas. *The Dual Tradition: An Essay on Poetry and Politics in Ireland*. Oxford: Carcanet P, 1995.
- Leavis, F. R. "Joyce and 'Revolution of the Word,'" *Scrutiny*, vol. II, no. 2 (1933): 193-201.
- Levin, Harry. *James Joyce: A Critical Introduction*, Conn.: New Directions, 1941.
- Lewis, Wyndham. *Time and Western Man*. Ed. Paul Edwards. London: Chatto and Windus, 1927.
- MacCabe, Colin. "Uneasiness in Culture," *Cambridge Review*, vol. 93, no. 2208 (1972): 174-7.
- Nolan, Emer. *James Joyce and Nationalism*. London: Routledge, 1995.
- Pound, Ezra. *Pound/Joyce: The Letters of Ezra Pound to James Joyce, with Pound's Critical Essays and Articles about Joyce*. Ed. Forrest Read. New York: New Directions, 1967.
- Sinfield, Alan. *Literature, Politics and Culture in Popular Britain*. Oxford: Blackwell, 1989.
- Smyth, Gerry. *Decolonisation and Criticism: The Construction of Irish Culture*. London: Pluto P, 1998.
- Vanderham, Richard. *James Joyce and Censorship: The Trials of "Ulysses."* New York: New York UP, 1998.
- Wilson, Edmund. *Axel's Castle*. New York: Charles Scribner's Son, 1931.
- 結城英雄『ジョイスを読む』集英社、2004年。